

PCM工法協会東北支部

現場の工夫を確認

県内初 安全パトロールを実施

PCM工法協会東北支部(伝野得男支部長)は10日、米沢市が発注した橋梁耐震補強工事で現場安全パトロールを実施した。同支部のパトロールとしては3回目、山形県内では初の実施となる。

PCM工法は、無機質主材のマグネコンパウンド

と、複合高分子ポリマーのマグネエマルジョンを現場配合して使用するPAE系の多機能特殊ポリマーセメントモルタルとなる「マグネライン」を用いて補強・補修する工法。橋梁の場合、橋脚はPP工法(RC橋脚巻きたて補強工法)となる。

米沢市発注の「市道米沢駅東線八幡原大橋下部工耐震補強工事(その1)(その2)」は、橋長273メートルの八幡原大橋の橋脚耐震補強で巻立て工各2基、隔壁工、橋梁付属物工などを行うもので、PP工法により施工を勧めている(施工II後藤組)。

同工法は、建築限界や河積阻害など施工が制約される場所で真価を発揮する増厚工法。施工厚が薄くなるため、河積阻害率を小さく抑えることができるほか、さびに強く耐久性も確保されるなどのメリットがあり、橋脚のほか水門の補強など、さまざまな制約条件下での耐震補強工法として多くの実績を残している。

当日は、東北で第一の施工実績を持つリックス(武

田庄悦代表取締役社長)をはじめとした会員企業から、新型コロナウイルス感染拡大に配慮して参加者を厳選し7人が参加。現場付近の万世事務所で行われた説明では後藤組の佐藤二郎現場代理人が「発注者が示した規格値よりもさらに厳しい基準での製品納品を社内ルール化することで、製品の品質の高さを確保している」と話し、現場の気温を逐一記録するアプリの使用などの具体例を紹介した。

説明後は、橋脚の吹付け、塗装状況などを見学。気温5度以下ではポリマーセメントが固まらない点、過度に厚い塗装が河道阻害を起す原因となる点などに配慮した現場の状況を規格値と比較しながらチェックした。

最後に伝野支部長は「これからインフラメンテナンスがあらゆる場所で重要となってくる。現場の品質管理を徹底し、次の同種工事の現場を担当した際にはさらに質を上げられるように努力してほしい」とパトロールを締めくくった。



パトロールを行う参加者